

嶋田智明・大峯三郎・小林 聖(編)

実践 MOOK・理学療法プラクティス 脊柱機能の臨床的重要性と上下肢との連関

井崎義己

(長崎リハビリテーション学院理学療法学科科長)

実践 MOOK・理学療法プラクティスのシリーズは新人理学療法士の臨床能力向上を目的に刊行されている。その最新刊である本書からも、シリーズに共通する編者や執筆された先生方の気概と葛藤が十分に伝わってくる。活字を読むことが極端に苦手な年代を対象としているため、文字数が多いと敬遠されるし、手にして読むまでに至らない場合が多い。そうかと言って、あまりにも簡潔すぎると逆に「意味が通じず、理解しにくい。」ということになりかねない。何よりもその体をなさなければ専門書としての意味がなくなってしまう。このように二律相反する難しい状況の中で「まずは手にとって、読んでもらわないと始まらない。」という担当の先生方のご苦労と努力の跡が随所に伺える仕上がりになっており、まずこのことに敬意を表したい思いである。

理学療法士が「脊柱」に関心を寄せる場合と言えば、「腰痛」やそれに対する「徒手療法」、そしてその原因や結果となる「姿勢分析」を行う際などがまず頭に浮かぶ。本書の特長は、それらに関する基本的な事項はもちろんであるが、特にミニレクチャーなどにおいて、解剖学や運動学と障害とをリンクした形で評価のポイントや考える視点などが分かりやすく丁寧に示されており、臨床での評価や介入やとらえ方の根拠がそこにしっかりと見出すことができる点にある。

また、何よりも「脊柱の発生と進化」という内容が興味深く、本書の初めに取り上げられていることは「理学療法学」が体系的な学問としても進歩してきている

と評価して良いと考えている。20 年も前になるが、「理学療法士は運動器の解剖学には関心もあるし、勉強もする。しかし、今からの理学療法士には、地味ではあるがその強みである解剖学や運動学を発展させるためにも発生学が必要となる。さらに、治療技術の根拠を示し、医師と対等に物を言うためには病理学が必要となる。今すぐにその学習をなささい。」と、今は亡き恩師である内藤芳篤先生(長崎大学医学部名誉教授)から厳しくご指導を受けた。本書を手にして、その言葉の意味や重さを改めて実感しているところである。

最近の研究では、「姿勢」のみならず、「動作」や「パフォーマンス」の面からも脊柱が注目されてきている。それも発生学の面からである。人間は脊椎動物として進化を遂げ、他の生物にない知恵と文化を獲得してきた。反面、「魚のように速くは泳げないし、チーターのように速く走ることもできない。」など、多くの動きや能力をその進化の過程において犠牲にしてきている。「もし、人間が可能な限り同じ脊椎動物として、四足動物や魚類のような動きや身体を使い方ができれば、もっと動作やパフォーマンスが向上する。」という考え方である。このことは、理学療法士にとっても興味を抱かせる発想である。若い理学療法士においては、通常理学療法業務に止まらずスポーツ分野について高い関心をもつ者も多い。動作やパフォーマンスの向上には「土台」としての脊柱に加え、「動き」の起点としての脊柱の存在を整形外科分野やスポーツ分野の理学療法士はもとより、その他の多くの分野の理学療法士にも是非とも知ってほしいと思っている。そう意味からも価値ある 1 冊である。脊柱に関する学習の導入として、またさらなるレベルアップへのステップとしても一読を薦めたい。

●B5 版・180 頁・2 色刷

定価 4,725 円(本体 4,500 円+税)

2011 年 1 月 文光堂・刊